
里美八チ犬伝

和本明子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

里美八チ犬伝

【Nコード】

N7736Y

【作者名】

和本明子

【あらすじ】

小学三年生になったばかりの藤井里美が、小学校に通う途中で真っ白な犬と出会うことから全てが始まる。

“犬が駆け出しても笑う”を目指した、ドタバタギャグコメディです。

前置き

犬も歩けば棒に当たる、犬が西向きや尾は東、犬猿の仲、負け犬、犬神家、あとはなんだったか……と、覚えきれないほど“犬”に関する言葉や熟語、諺などは数多くあります。

それは古来より犬が、家畜として、そして良きパートナーとして人間と深く関わってきた証明でもあります。

それに人間の身体の一部に、犬の名が付いた箇所があります。そう、犬歯。

門歯の両側に尖った歯を一般に犬歯と呼んでいますが、人間の犬歯は糸切り歯とも呼ばれています。それを犬歯と呼ばれる所以は、もちろん犬の犬歯から。

ちなみに犬の歯は四十二本。他の歯も、犬歯のように鋭く尖っています。歯というよりも、牙といった方が相応しいでしょう。

そんな鋭い牙をチラつかせている犬の食事光景をじっくり観察していると、食べ物はあまり噛まずに、呑み込んでしまっているのが解かります。

犬の歯は、人間のように噛み砕くのではなく、切り裂くということに重点が置かれている仕組みとなっています。これは、狩りで獲った獲物の肉を引き千切りやすいように、進化したのではと考えられます。

そもそも犬とは……おっと。今回は、犬についての講釈やウンチクをたれるものではありませんでした。語るべきお話しは、ある一匹の犬と一人の少女のハートフルで愉快なお話。

それでは、はじめ……。

ああ、それと大切な事を忘れていました。注意事項を一つ。

残念な事に、この話には猫は一切でてきません。もし猫好きな方が、ご拝読しているのでしたら、今すぐ犬好きになるか、猫と同じ

ぐらい犬を好きになる。それか犬を猫と思うようしてください。

それは無理？

何を仰いますか。猫と犬の遠いご先祖さまは、元々は一緒だという説があります。

その証拠に、犬は“ネコ目”イヌ科イヌ属に分類されている哺乳類。そんな訳で、犬を猫だと思っても何の問題はありません。

ただ、その場合は人前で犬を見て、あれは猫だと指差して言わないでください。言ってしまうと、アナタ様が変な目で見られてしまいますので、ご注意ください。さるよう、お願いします。

さて前置きが長くなりましたが、それでは『里美八チ犬伝』の始まり、始まり――

題一話 里美と白い犬

里美は学校に行く途中、限りなく真っ白な犬を見た。

市立の小学校に通っている藤井里美は、小学三年生になって早一ヶ月。既に桜の花は散ってしまったが、まだ里美の心は桜が満開しているように爛漫だった。

ショートカットの髪型とショートパンツが相まって、里美の活発さを表しているほどに元気っ子である。

背中に背負う赤いランドセルの端っこ辺りがくたびれ始めている。最近では、ランドセルに教科書は入れず、カラフルでスタイリッシュな補助力バンに入れていた。

つまり空っぽのランドセルを背負っているのだ。

何故そうしているのかというと、小学三年生にもなれば少しフツシヨンに目覚めてしまう、お年頃。皆と同じランドセルに嫌悪感を抱き、人とは違う個性と独自性を出したい……というより、魅せたいのだ。そこで決められた枠^{リム}内の中で、それらが可能なのが、唯一自由に持つてきていい補助力バンなのである。

しかし、学校の規則でランドセルは必ず持つて来なければならない、里美は渋々と軽いランドセルを背負っているのだ。

ランドセルの本来の役割を果たせておらず、小学生を示すシンボルでしか意味を成していない。そもそも育ち盛りの時に、片方に集中して重いものを持つのは、体の軸バランスが崩してしまうので、非常によろしくないのだが……。

そんな天使の羽のように軽いランドセルを背負い、筋トレができるほどに重い補助力バンを手に持って、七時三十分から一時間は車の通行が制限された通学路を歩き、学校へ向かっていた。

その道中で、限りなく真っ白な犬を見たのである。

その白さは朝食でいつも食卓に出されている、お腹に優しくカル

シウムの吸収に良いビタミンDが配合されたスーパー牛乳と同じぐらいの白さだった。

あまりにも白い犬だったために、里美は思わず足を止め、その犬の様子を凝視し始める。

「野良犬なのかな？」

里美はそう呟く。

犬の首に首輪は付いていない。しかし、野良にしては白く綺麗だった。その白い犬は三角形の小さな耳をピンッと立たせ、目じりが吊り上がった目、そして背中の上に巻いた尾が愛嬌を振り撒きまくっていた。大きさは中型犬といわれるサイズだ。

登校時間は、まだ余裕があるから大丈夫。里美は、暫く白い犬を眺めることにした。

すると白い犬は電柱の前に止まり、左後ろ足を上げては用を足そうとした。しかし、左足を上げたものの、その左足を一旦下ろし、身体の向きを反対に入れ替え、今度は右後ろ足を上げた。

何かが気に食わないのだろうか。それとも、ポジション（位置）がしつくり来なかったのか、また右足を下ろし、左足を上げる。そしてまた左足を下ろし、右足を上げる。

里美は、最近まで母が毎日やっていた、家庭用ゲームでエアロビ体操のような運動をしている母の姿を思い浮かび、犬と重ねると思わず「ぷつ」と、吹き出してしまう。

流石は犬。小さな音だったが、その音で里美に気づくと、お互い様子を伺うように見つめ合う。

「おいでよ！」

里美が手招きしつつ誘うものの、犬はウンともスンとも。

『オマエは、何をしているんだ？』と言っているような表情で、白い犬は首を傾げる。

痺れ切らした里美は白い犬に近づこうと一歩前へと踏み出すと、白い犬は後ろ足を一歩後ずさりする。

また里美が一歩前へと踏み出す。

すると白い犬は、また一步後ずさり。

前へ、後ろへ、前へ、後ろへ。

「……………」

近づけば遠ざかる。そんな足しても引かれる差し引きゼロのヤキモキする状況に、少しムツとする里美。

今度は里美が、一步後ずさりしてみると……。

白い犬は前へと歩み出る。

後ろへ、前へ、後ろへ、前へ。

まるで、犬にバカにされているような。いや、ハタから見れば里美と犬との光景は非常にバカゲタ様子。その証拠に通学路を通り行く里美と同じようにランドセル背負った児童達が、里美と犬とのやり取りを横目で何やっているんだらうと、？マークを浮かべていた。しかし、このままでは犬に触ることも近づく事もできずに、埒が明かない。だが、知恵が働くのが人間。

そこで里美は考えた。

「そつだ！」

里美は右足を一步下げた瞬間、素早くその足を前へと踏み出した。すると白い犬は後ろへ下がるものだと思ったのか一步前へと歩み出ており、里美と白い犬の距離は二歩分縮まった。

同様の動きを今度は左足でやってみる。今度も犬は一步前へと。

里美との距離が縮まっているのを白い犬は、気付いているのかいないのか。名付けてブランコ移動を繰り返していき、段々と近づく。

（よし、もう少しで……）

しかし、犬も犬ではあるが馬鹿ではない。野生の危機センサーが働いたのか、里美が白い犬に触れるあと一步のところで、

「！」

遠ざかっているはずなのに近づいている事に気付いた犬は慌てて、尾っぽを里美の方に向けて、今まで近づいた距離がゼロどころではなくマイナスになるほど、遠く離れてしまった。

「あゝ、もう！」

残念がる里美。また近づこうとするも警戒感が増してか、里美が
一歩近づけば白い犬は二歩三步と後ずさりし距離を取る。

後を追いかけようとするも、通学路にちらほらいた児童達の姿が
見なくなっていることに気付く。

里美の体感時間的に、そろそろ学校へと急いで向かわないと遅刻
してしまうのではと焦りを感じてしまう。

里美は名残惜しそうに遠くにいる白い犬に向かって、

「それじゃーね。バイバーイ」

手を振りつつ、スラッとしたおみ足を元気良く動かし、学校へと
駆けて行った。

遠ざかり小さくなっていく里美を、白い犬はただジッと眺めてい
た。そして、ゆっくりとその後を追いかけていくのであった。

題二話 宏子と清、そして掛布

かなり余裕を持ってチャイムが鳴る五分前に学校に到着できた里美。走ったわりに、息一つ切れていないのは、若さと健康的な身体を持つている証でもある。

廊下を走るような速さで歩いて―つまり走歩きで―三年一組の教室に入ると、既に大半の生徒が来ており、ワイワイガヤガヤと賑やかにしていた。

「おはよー」

と、教室にいる皆に朝の挨拶をしつつ、早足で自分の席へと向かう。里美が席に着くと隣の席に座っていた、短いツインテールの女子が声をかけてきた。

「里美ちゃん、おはよー。今日は、いつもより遅かったね。どうしたの？」

彼女の名前は小林宏子。活発な里美とは対照的に、もの静かで素朴な性格だが、里美と仲の良い友達の一人。

「おはよー、ヒロちゃん。いやー、それがね。変で面白い犬がいてね。それを見てたら、遅くなっちゃった」

「変で面白い犬？」

「うん、そうなの！ 私が近づこうとするとね、逃げるの」
「……え？」

「私がね、一步近づこうとしたら、犬の方も一步下がるといつか逃げるの」

「それって……普通のことなんじゃないの？」

宏子は素直に自分が思ったことを口にした。

「えっ」と、意外な感じで驚く里美。

「私のところの近所の犬も、私が近づいたら逃げちゃうんだよ。可愛いチワワなんだけど……ナデナデしたいのにな……」

「えーそうなの……。ああ、それに私が一步下がると、その犬が私

に一步近づくんだよ」

「それって……」

宏子は、その光景を頭の中でイメージしてみたが、あまりにも馬鹿馬鹿しいシーンだったために、思わず嘖き出してしまう。

突然の笑いに里美は「なに？」と訊くが、

「え……いや、ちよつと……」

今度は苦笑いで返した。

そんな二人の会話に釣られて、里美の後ろの席に座っている男子が声をかけてきた。

「なんの話してるんだ、藤井？」

「渚くん。それがね、面白い犬を見たの」

「面白い犬？　どんな？」

里美は、先ほど宏子にした話をスポーツ刈りが似合う少年―小久保渚―にもするも、渚は頭を掻きながら、

「それ、普通じゃない？」

素っ気無く感想を漏らした。

「だよね」と、渚の意見に賛同する宏子。

「あれ？」

里美は「説明は間違っていないのに、どうして伝わらないのかな？」と、首を傾げる。

「近づいたら逃げるなんて、野良犬とかなら当然だろ。俺もそういうことがあったよ」

「逃げるといつても……うーん……」

どうすれば、あの状況を明確に伝えられるのかと言葉を探すが、どうしても見つからず言葉に詰まる。

正しい説明をするにも、勉強は大切だと実感させられる瞬間であった。

「面白い犬って言うから、てっきり人面犬なんかと思ったよ」

「ジンメンケン？」

聞きなれぬ用語に、思わず聞き返す里美。

「え、知らないの？ 犬の身体なのに、顔が人間のおつ……」

渚の話の途中にも関わらず、内容を察知した宏子は、一瞬で青ざめ、

「いや~~~~~！」

と、悲鳴に似た声を上げ、両耳を塞いだ。

突然の叫び声に、何事かと里美と渚以外の生徒達も宏子に注目する。

「ああ。ヒロちゃん、恐い話が苦手だからね」

「恐いか？ 人間の顔が付いている犬なんて面白いと思っただけ……」

しかし、当の宏子は、

「聞こえない！ 聞こえない！ あー！ あー！」

渚の声が聞こえないように大きな声を出し、呪文のように繰り返していた。

「ヒロちゃんには恐いみたいだね」

そうこうしていると、チャイムが鳴り響く。

「あ、早く」

里美は、まだ教科書などを出していない事に気づくと、慌てながらカラフルでスタイリッシュな補助力バンから教科書や筆箱などの勉強道具を取り出し、少々粗雑に机の中に仕舞い込む。

そして、補助力バンは机の横にかけ、本来の役目を持たせて貰っていないランドセルを教室の後ろに設置されている、通称“物置ボックス”へと置きに行こうと席を立つと、未だに両耳を抑え、呪文を唱えている宏子の姿が目映る。

「ヒロちゃん……。ほら、もう恐い話はしてないよ」

ポンッと宏子の肩を軽く叩くと必要以上に肩をビクッと震わしてから、ゆっくりと里美の方を見る。

「え、あ……」

平静を取り戻すと、先ほど青くなっていた顔に赤が浮かぶ。そんな恥ずかしさで縮こまる宏子を見て、里美は愉快そうに明るく笑っ

た。

すると、大人の女性が教室に入ってくる。

「あ、二宮先生だ」

二宮先生は、教師歴七年。ギリギリ二十代の二十九歳であるが、古臭さを感じさせる丸メガネをかけており、少しパーマがかかったセミショートの髪型がおばさんっぽさを漂わせていた。

里美は、そそくさとランドセルを置きに行く。他のクラスメート達は全員着席を終えているので、急かされているような感じがして出来るだけ早くランドセルを置き、席に戻った。

そして、里美が着席すると同時に学級委員長が、

「起立」

と号令をかけ、一同は委員長の号令に従い、おなじみの朝の挨拶が行われる。

「おはようございます！」

バラツキがあるものの大きな声が教室に響く。

「はい、おはようございます。それでは、出席を取ります。青木くん」

あ行から順々に苗字が呼ばれ、その苗字に該当する生徒は元気良く「はい」と返事していく。そして、か行に入り、

「掛布くん……」

と苗字を呼ぶも、返事は返ってこない。

「掛布博和くんは……」

二宮先生は、一番後ろの空席となっている机を見ると、小さなため息を漏らす。掛布の親御さんから何も連絡が無かった。という事は――

「掛布くんは、また遅刻なのね……」

そう言っや、出席簿に遅刻マークを書こうとすると、廊下から勢い良く駆けてくる音が響き渡る。次の瞬間、教室の扉が開かれると同時に第一声、

「ギリギリ、セーフ！」

“自分は間に合った”とアピールのために、わざとらしく大げさに声を張り上げたのは、クセの強い天然パーマが印象的で、タレ目がちの少年である。少年は不敵な顔で、堂々と教室に入ってきた。

二宮先生は落ち着いた口調で真実を告げる。

「バリバリアウトですよ。掛布くん」

「え、マジっすか？ おかしいな……。俺の腹時計では、まだ八時二十五分ですよ」

「教室の時計を見なさい。今、何時ですか？」

時計の針は、八時三十八分を差していた。

たった八分だろうが遅刻は遅刻。こういった規則厳守は、子供の頃からしっかりと教えていかないと、自分に緩いグーたらな大人になつてしまうもの。

「ていうか、これには訳があるんですよ先生！」

「どんな訳ですか？」

眉間にシワを少し寄せる二宮先生。だが、掛布はそんな微妙な変化に気付いておらず、訳を述べる。

「来る途中、川で溺れている犬がいて、その犬を助けていたんです」

「嘘を言わないの。川の中に入っていたのなら、服は濡れているんじゃないの？」

「だ・か・ら。服が濡れたから、家まで戻って着替えに……」

言い訳を重ねる掛布に対して、めったに怒らないと評判の二宮先生も流石に、

「言い訳をしない！ 遅刻は遅刻。三年生になったんだから、ちゃんとしっかりしなさい」

厳しい口調で掛布に注意を与える。

「それに廊下を走らない。さっき走ってきたでしょう！」

「だって、走らないと間に合わないと思って……。ってか、なんだよ先生。さっきは遅刻はすると言ったクセにさあ、廊下を歩いてきたら遅刻しちゃうよ」

「走っても遅刻しているんでしょう！ 十分前登校を守っていれば、

遅刻はしないでしょー！」

二宮先生と掛布のやり取りが漫才のようで、クラスメート達から呆れた笑いが出る。

「掛布くん、相変わらずだね」

そう宏子が里美に耳打ちをすると、里美は笑って返した。

二宮先生は少しグツタリとし、これ以上掛布との押し問答する時間が無いと半ば諦めがちに、「もういいから」と席に着くようにと促した。掛布は、ここは素直に二宮先生の言う事に従った。

二宮先生は教師になって、早七年。毎年、掛布みたいな問題児は必ず一人は居るものである。そんな生徒に対して上手く対処していくことが教師として宿命であるが、流石に毎年続くのには疲れるものだ。さっきも申した通り二宮先生はまだ二十九歳ではあるが、心の年齢は三十路を超えて四十歳を過ぎているようだった。

しかし、そんな感情を微塵も出さずに、自分の心を落ち着かせる。そして二宮先生は、いつもより強くクツキリと出席簿に遅刻マークを記入し、中断された出席確認を再開した。

そんな朝の光景をよそに“招かれざる客”が、四本足で里美たちの小学校に近づいていることに、当然ながら誰も知る由は無かった……。

「ワンっ？」

題三話 珍客の来訪

それは二時限目の算数の授業中だった。

授業内容は二桁×一桁の掛け算。計算問題を解いていると頭の中がオーバーヒートを起こしてしまう。それは成績優秀の宏子にも該当することだった。

そこで宏子は、窓側の席に座っている利点を活かし、少し気分休めとして外の景色―グランド―を眺めていた。すると、広大なグラウンドに見慣れぬモノが徘徊しているのを発見する。

「あれは……犬？」

遠目ではハッキリと姿は確認できないが、おぼろげだが四本足の白い生き物―犬―であることは解かった。

授業そっちのけで、その生き物を追いかけようとしたが――

「それじゃ次の問題を……小林さんと、隣の藤井さん。解いてください」

突然、二宮先生に指名され、慌てて返事をする。

「あ、はい」

席を立ちつつ、再び窓の外を見たが、

（あれ……どこに行っただろう？）

白い犬は何処かに行ったらしく、姿を見失った。

ぼーと、立ち尽くしている宏子に里美が声を掛ける。

「どうしたの、ヒロちゃん？」

「あ、うん。なんでもないよ」

後ろ髪を引かれながら、里美の後を追いかけていく。

黒板には、

―― 2 2 × 4 ――

―― 3 3 × 7 ――

と、白いチョークで大きく書かれていた。

「それじゃ、一問目は小林さん。二問目は藤井さんが解いてくださ

い」

二宮先生はそれぞれが担当する問題を指示する。里美は内心、一問目の問題を望んでいたが、渋々とチョークを二本手に取り、その内一本を宏子に渡してあげる。

「ありがとう、里美ちゃん」

同じチョークで問題に挑んでいるはずなのに、宏子はそのチョークを動かし、特に悩むことも無く計算式を書いていき問題を解いていく。しかし、里美の手は止まったままだった。

里美は掛け算の暗算が、特に七の段が苦手だったこともあり、頭の中で計算しながら片手の指でも計算するも、当然ながら指の数が足らず、行き詰ってしまう。

計算に四苦八苦していると、どこからとも無く野次が飛ぶ。

「なんだ藤井、そんな簡単な問題も解けないのかよ」

里美はムツとした顔で振り返り、野次を飛ばしてきた問題児―掛布博和―を睨む。

「うるさいな。今、考えている最中じゃない」

「そんなの考えなくても解けるだろう」

あざけるかのような憎たらしい表情を浮かべていた。

「だったら、あんたが解いてみなさいよ」

「へん、そんな簡単だよ」

そう言うつと掛布は立ち上がり、意気揚々と前に出ようとしたが、掛布くん。チョツカイを出さない、来ないの」

二宮先生が制止し、そして問題に悩む里美にアドバイスを与える。「藤井さん。間違っても良いから自力で解いてみなさいね。教室は間違っ所。間違って、何が間違っているのかが気づく事が大切なんですからね」

そうは言うものの。皆の前に出るといふ事は恥ずかしく思えるようになる年頃でもあり、そんな皆の前で間違っという事は、歳を取る事によってより“恥”を感じてしまう。その為か学年が上がるにつれて、率先として手を上げて答える生徒が少なくなってしまうの

である。

しかし、里美の場合は皆の前で間違うよりは、間違つて馬鹿な相手（掛布）に馬鹿にされる事が嫌な訳で、ここは何としてでも正解しなければならぬという使命が生じてしまっていた。

だが、それが変にプレッシャーを感じてしまい、頭をフル回転するものの「七一が七、七に十四、七三、二十…二？」と、単純な計算ミスを仕出かしてしまう。

「さ、里美ちゃ……」

悩む里美を見かねて宏子が助け舟を出そうとしたが、

「ほら小林がまだかと、待ってるぞ！」

「あ……」

掛布のツツコミが一步早く、言うタイミングを逃してしまった。

「わっ、分かつてるわよ！」

掛布の何気ない一言は「独りでも問題は解け」という釘を差すもので、これで里美から宏子に助言を求めることが封じられた。

どちらにしろ、里美自身が解かなければならないのだが、あらためてたった一人で問題に挑まなければならぬという重圧を感じる。

重圧は頭の回転を鈍くしてしまい、それがチョークを動かす腕にも連動する。

そんな里美に対して――

宏子が心配そうな顔で見つめ――

二宮先生は黙って様子を伺い――

掛布はニヤニヤと薄笑いを浮かべる――

皆の期待を一身に背負い、ゆっくり、そして、少しずつ計算式を書き解いていく。

そして、百の位の数字を書こうとした、その時だった――

「うわっ！ 犬だ！」

誰かが声をあげた。

すると白い犬が素知らぬ顔で教室に入ってきたのだ。

教室にいる全員が一斉に突然の珍客へと視線を向け、たった一匹の犬の登場では騒然となり、もはや授業どころでは無かった。

学校とは特殊な空間だ。漫画とかゲーム機など普段持ち込んではいけないものがあるだけで、テンションが上がってしまう。これが自分の家とかだったら、テンションは上がりはしないのだが……。だから学校に、漫画とか持ち込みをしまふ生徒がいるのじゃないか。

さて、それは犬といった動物も同様。

教室に普段いないはずの“モノ”が現れた。それだけで心が、はしゃぐお祭り騒ぎ。

好奇心旺盛な生徒——特に男子たちは犬を取り囲んで触ろうとしたり、女子とかは突然の来訪者に怯え、自分の席を立ち犬から距離を取っていたりした。

そんな騒動を皆とは少し離れた場所——黒板の前——で眺めている里美と宏子。

クラスメート達の間から垣間見える犬の姿に里美が思わず声を上げる。

「あ、あの犬は！」

「え、里美ちゃん。どうしたの？」

「あの犬だよ、ヒロちゃん。私が朝見た、面白い犬」

「え……あれが？」

里美が指差す犬は、何処からどう見ても雑種の野良犬……つまり普通の犬に見えた。

その犬を取り囲んでいる男子達は「お手」だ「お座り」だと命じているが、ピンつと立てている三角形の耳に声が聞こえていないのか、それとも言葉の意味が分からないのか、それらを無視し、ただ立ち尽くしていた。

そして誰かが犬に触ろうとすると、犬は口をガツと開き近づいてきた手を噛もうとした。手を差し出した生徒は素早く引つ込め難を

逃れ「あつぶね」と冷や汗をかいた。

他の生徒達も触ろうと手を差し出し始め、誰が一番最初に犬に触れるかのゲームを遊んでいるようだった。

「み、みんな。遊んでいないで、早く犬を教室の外に出して、ください！」

怯えるグループの生徒達を盾にして、身を震えている二宮先生が注意してきた。だが、その注意は、先ほどの掛布を注意した時とは違って、弱弱しいものだった。

「あれ。もしかして先生、犬が苦手なんですか？」

生徒の問いに凶星を付かれ、さらに戸惑い困惑する二宮先生。その様子に『ワツハハハ』と笑いが起こる。二宮先生にとっては笑い事では無いが、3の1の生徒たちにとって、大の大人が、たかが犬如きに恐がっているのは新鮮な体験だった。

しかし犬を追い払おうとしても、まったく動じず、言うことを聞きはしない。そして触れようにも、牙が襲い掛かってくる。

どうするかと思案していた時、掛布が我こそはと前に乗り出した。

「やっぱり、ここはオレが何とかするしかないな。人間様が犬よりも偉いということを見せ付けないとダメなんだよ。下に見られていると、言うことを聞かないと言うしな」

どこかのテレビの番組で得た知識を口に出しつつ、

「いいか、見てろ！」

スうと息を吸い、

「お手っ！」

高圧的な態度を醸し出し、普段よりも数段低い声で言い放つと同時に、右手を白い犬の前へと差し出す。そして白い犬は、左後ろ足を高々と上げ、掛布が差し出した手に“しっこ（尿）”をかけ放った。

掛布はもちろん、周りの生徒達も何をされたのか理解する事が出来ず、場の空気が一瞬静まった。そして、掛布がその尿の温もりを

脳が感じ取った瞬間、

「……ぶっ × ヒイ × □!!」

言葉にならない叫びをあげた。

そして今度は、周りから大爆笑の渦が巻き起こる。

「何やってんだよ、掛布!」

「ウワっ……バッチイ!」

「近寄んなよ、掛布!」

「電柱と勘違いされてやんの」

憐れみと馬鹿にする言葉を投げかけられ、掛布の近くにいた者は
三步ほど距離を取った。

「どうわ~~~~! なにすんだよ、この馬鹿犬!」

怒鳴り声をあげ、しっこをかけられた怒りをぶつけようと、しっこをかけられまだ温もりを感じる右手を握り締め殴りかかるうとした。だが、犬は自身の身に降りかかる危険を感じ取ったのか、突然走り出し掛布から、そして教室から飛び出した。

「あつ。待て、この野郎!」

すぐさま掛布も後を追いかけると、数人の生徒も面白そうだと後を追いかけて教室を飛び出す。その中に里美も含まれていた。

「里美ちゃん……」

宏子は、もう姿が見えない友の名前をボソツと溢し、プチ学級崩壊な状況になってしまった事に、二宮先生はただ呆然と立ち尽くし、うつすら涙を溢していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7736y/>

里美八千代伝

2011年11月27日11時53分発行